

あとがき

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
調査研究 トップスポーツ・プロジェクトリーダー
岡本純也

本調査研究プロジェクトの着想のもととなったのは、2010（平成 22）年に策定された「スポーツ基本計画」の中で謳われ、2011（平成 23）年度より文部科学省によって取り組まれている「地域スポーツとトップスポーツの好循環推進事業」である。この事業では「地域において次世代アスリートを発掘・育成する体制を整備し、将来、育成されたアスリートが地域の指導者となる好循環のサイクル」の確立を目指している。そのような地域社会像は、「スポーツ基本法」の前文でも謳われており、スポーツによって住民が幸福となる社会の具体的なビジョンとして浮かび上がってくるものである。

しかしながら、今年度の共同研究に着手し、対象を明確にしようとした段階で、「トップスポーツ」という言葉を扱うことの難しさに直面することとなった。概念としては「プロスポーツ界やアマチュアスポーツ界を問わず、世界の高度な競技レベルで活躍する選手やチーム」という規定はできるものの、では具体的に、どの競技種目の、どの競技レベルまでの選手・チームを対象とするのかという問いを立てるとその全体像の把握は困難となるのである。

そこで、ここでは、「トップスポーツ」の範囲を明確にすることはせずに、「持続可能なシステム構築」の探索に資する対象を選定することで本プロジェクトを進めていくこととした。今年度も昨年度に引き続き、ラグビーフットボールを調査研究対象としたが、その理由は、長年、企業スポーツとして社員ファンや愛好家に支えられてきたラグビーの育成・強化のシステムが、近年、グローバル化やメディア環境の変化によって大きく変わろうとしていると考えられたのである。特に 2019 年のラグビーワールドカップ日本大会や 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックを目の前にしているラグビー界にとって、本プロジェクトで得られたデータや知見は、各地の自治体や協会、チームなどの取組みにダイレクトに役立てられると考えた。

たとえば、今回 2 会場で実施したジャパンラグビートップリーグの観戦者調査は J リーグの観戦者調査との比較ができるように設計されたが、結果からは、サッカーファンと比較したラグビーファンの特徴、また、地域ごとのファンの特性などが浮かび上がることとなっている。このようなチームごとの観戦者の特徴の把握は、ターゲットを明確にしたファン層の拡大策や青少年を対象にした普及事業などの立案に役立つことであろう。

ここで慌てて強調しておきたいのは、本報告書および調査データは、調査を実施した会場・地域の関係者以外にも、そして、ラグビー以外の競技種目の関係者にも役立つことを想定して作成されていることである。附録として添付した質問紙は、そのまま他のスタジアムでの観戦者調査に使用できるであろうし、また、巻末のデータは本報告書を参考とした調査から得られた結果を比較しやすいように構成されている。さらに、当財

団の担当者にご連絡をいただければ、今回の調査の集計前の電子データを提供したいと考えている。各地の、そして、野球、バスケットボール、バレーボールなどのさまざまな競技種目の普及振興活動に利用され、種目間や地域間の比較可能なデータの蓄積が進むことこそ、本プロジェクトの目指すところである。多くのスポーツ関係者の皆様のデータの活用を期待したい。

最後に、今年度の調査研究にあたりご協力いただいたラグビーフットボールファンや関係者の皆様方に厚く御礼を申し述べたい。